新任職員研修　実施レポート

視聴期間：令和３年５月１３日（木）～５月１４日（金）
視聴方法：YouTubeによる視聴　　参加者：４８名

新たに生涯学習・社会教育行政の現場に着任した職員を主な対象に「新任職員研修」を実施しました。社会教育の役割と可能性のほか、関係職員に求められる心構えなどを学びました。

【研修の形式について】

当初は生涯学習センターで実施する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、事前に研修内容を撮影・編集しました。そして受講者に視聴用URLを送り、YouTube上で限定公開し、受講者の勤務状況に応じて視聴・研修する形式としました。研修動画はおよそ２時間となりました。

【前半】

生涯学習センターの**皆川 雅仁社会教育主事（社会教育メンター）**が、「開かれ、つながる社会教育の実現に向けて～社会教育関係職員の社会的責任～」のテーマで講話しました。その中で、まず平成２９年度の社会教育法改正に伴い「地域学校協働活動」（＝幅広い地域住民の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支え、「学校を核とした地域づくり」を目指し、地域と学校がパートナーとして行う活動）の円滑かつ効果的な実施に向けた取組が教育委員会の重要な仕事の一つになったことを確認した上で、「社会教育」も「学校教育」も「開くこと」「つながること」が必要とされている現状を指摘しました。

その上で、「社会教育」や「学校教育」が抱える課題の解決を目指す時に有効な話し合いの手法である「熟議」について学びました。「熟議」とは、①多くの当事者が集まって、②課題について学習・熟慮し、討議をすることにより、③互いの立場や果たすべき役割への理解が高まるとともに、④解決策が洗練され、⑤個々人が納得して自分の役割を果たすようになる、というプロセスのことです。この「熟議」は、目標の共有／課題の発見／課題解決に向けた協働／地域への波及／成果の共有など、様々な状況に応じ利用可能であることも学びました。

そして自らの経験に基づき、業務を進める手法としての「LRDC」マネジメントサイクル（Look-Reform-Do-Connect）と、社会教育主事の心構えとしての三原則「社会教育主事に“No”はない」「友達の友達は…皆友達だ！」「“こだわりをもたない”こだわり」を提唱しました。

<収録風景>

【後半】

後半は、生涯学習センターの**柏木 睦副主幹（兼）学習事業班長**が、「現代的な課題への切り込み方～生涯学習センターの取組事例から～」のテーマで講義しました。

<収録風景>

講義では、生涯学習センターが取り組んでいる「障害者の生涯学習」に関する説明がありました。一昨年度は、現代的な課題の一つである「障害者の生涯学習」について、ニーズ調査・社会教育職員専門研修・「障害者スポーツ」に関するスマートカレッジ講座の実施を並行して進めました。昨年度はこれを受け、調査研究報告書を作成しました。また、①「各市町村における学習機会促進のための研修」＝車椅子での街歩き体験や障害×防災研修の実施、②「障害のある方もない方も共に学ぶ場の創出」＝あきたスマートカレッジにおける障害者×防災講座の開催、③「民間と協働した共生社会実現に向けた取組」＝障害者スポーツコーナーの作成や企業との連携、「障害者の生涯学習」実践団体との交流、にも取り組んだことを説明しました。

最後に、「バリアフルレストラン」の体験を通じ、社会には多様な人々がいること、そして生涯学習は「いつでも・どこでも・だれでも・なんでも」を実現するものであることを学びました。

【参加者の声】（抜粋）
・社会教育に関する法令から現在の社会教育の課題まで、漠然と感じていた「わからないこと」について学ぶことができた
・『社会教育も学校教育も、「開くこと」「つながること」これなくして前に進めない』ということに、改めて共感しました。

市町村職員専門研修①　実施レポート

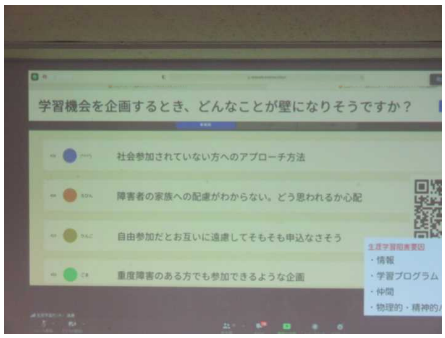
実施日：令和３年６月１６日（水）10時～15時　会場：生涯学習センター第１研修室　参加者：４３名

行政職員の知識や技術の向上を図るため、「市町村職員専門研修」を実施しました。１回目は「障害者の生涯学習講座の企画・運営と情報発信について学ぼう」がテーマです。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、生涯学習センターと各市町村とをZoomで接続し、研修を行いました。

【講義・演習】（午前）

当センターの**栗田　寿社会教育主事**が、『「障害者の生涯学習講座」の企画・運営について』と題して講義を行いました。講義では、障害者の生涯学習に関する動きや、当センターが障害者の生涯学習に関するニーズ調査とその分析を元に、「各市町村における学習機会促進のための取組」「障害のある方もない方も共に学ぶ場の創出」「民間と協働した共生社会実現に向けた取組」を行っていることを紹介しました。

後半では、「Live!アンケート」というWeb上のサービスを利用し、障害者の生涯学習に関する参加者の意見をリアルタイムで講義に反映させる取組を行いました。「学習機会を企画するとき、どんなことが壁になりそうですか？」という問いかけには、「障害者と一緒に活動することへの地域の興味と理解度が見えない」「障害を持っていると引きこもりがち。まずはおしゃべりやお茶飲みから」「障害の程度とサポート方法の知識不足」「社会参加されていない方へのアプローチ方法」『講座を企画する段階で「誰でもＯＫ」では薄い内容になりかねないので、やはり障害者向けに位置づけた内容でないといけない気がする』など、実際に市町村の現場で活動しているからこそ感じられる問題点が多く挙げられました。



【講義・演習】（午後）

午後は、当センターの**進藤　尊信社会教育主事**が、「コロナ禍での情報発信ツールの利用について」と題して講義を行いました。講義ではまず、どのような物品が必要かを確認した上で、コロナ禍以降の当センターによるZoomやYouTube限定配信への取組を確認しました。続いて、「目的を決める」→「手段を決める」→「具体的な方法を考える」の３段階に分けて情報発信ツール利用の有無を考えた上で、必要な場合に機器を利用すべきことを説明しました。

その後、心理面のハードルをいくらかでも下げるため、動画編集体験を行いました。その中で必要な機材についての説明し、『今職場にいる方の大部分が、そういった機材をそれなりに扱える状況』＋『詳しいことを教えてくれる人との連絡がつく状態』を構築することの必要性を説きました。

＜配信時の様子＞

【参加者の声】（抜粋）

- Live!アンケートを使って匿名で他の人の意見を聞くこと、また、自分の意見を言えることが新鮮で、とても良いなと思いました。
- アンケート投票がとても面白かった。無記名だからこそ、気負いすぎずに様々な意見を出すことができ参加しやすかった。他地区の方の意見も、もっと深く聞きたいものや議論したいものがたくさんあった。
- 情報発信に関してなかなか丁寧に発信の仕方を学べる機会もないのでとてもためになった。動画作成などもう少し踏み込んで勉強したいと思った。

秋田県生涯学習センター　令和３年度　生涯学習・社会教育関係者研修

公民館等職員専門研修①　実施レポート

実施日：令和３年７月１６日（金）１１時～１４時１５分　会場：県生涯学習センター　参加者：１８名

当初、生涯学習センター内及び駐車場を利用した車中泊研修として実施する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、オンライン研修に開催方式を変更しました。そして参加者が各自で車中泊等体験を行い、レポートを提出することとなりました。

【趣旨説明①・情報共有】

当センターの**柏木　睦 副主幹（兼）学習事業班長**と、**及川　真一 日本赤十字秋田短期大学講師**との対談形式で行われました。趣旨説明①では、当センターによる「障害者の生涯学習」への取組を過去に遡って説明しました。そして令和２年度公民館等職員専門研修①で行われた熟議の際、出てきた参加者の意見が基になり、生涯学習センター内及び駐車場を利用した車中泊研修を計画したこと、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から形式を変更して、研修参加者各自で車中泊等の研修を実施すること等の説明がありました。

その後の情報共有では、以下に挙げた動画から２本を視聴しました。これらの動画は、今回の研修の資料として、今後実際に車中泊等自宅から離れて避難をしなければならない場合に視聴できるようにするため、及川先生の監修のもと作成したものです。

０１　災害時の食について
０２　ガスとお米の炊き方について
０３　ポリ袋を使った調理と燃料について
０４　電気の確保と生かし方について
０５　トイレについて
番外編　１００円ショップで購入できる防災グッズ

動画の視聴を通して、ポリ袋を利用した炊飯や調理などの具体的な手順を確認することができました。

【趣旨説明②】

午前中に引き続き、当センターの**柏木　睦 副主幹（兼）学習事業班長**と、**及川　真一 日本赤十字秋田短期大学講師**との対談形式で行われました。

趣旨説明②では、車中泊等体験の目的や内容が説明されました。

【最近、異常気象とそれに伴う災害が頻発しています。ある日突然、災害等のため家庭の電源が使用できない状況下で、車中泊等で命を繋ぐ必要が出てくる可能性も否定できません。市町村職員・公民館等職員は避難所を運営する側に立つ場合が多いですが、自身が避難しなければならない状況になる可能性はあります。そのため、災害が起きる前に車中泊等を体験することで、日常生活の中でどのような対応ができるのか、災害のために何を準備しておかなければならないのかを体験し、災害に備えることが必要です。】

上記を踏まえ、以下の条件を遵守する形で、車中泊等体験を行うこととなりました。

①車中泊／キャンプで宿泊する。
②夕食・朝食を作る。
③家庭用電源を利用せずに炊飯・調理する。

秋田県生涯学習センター　令和３年度　生涯学習・社会教育関係者研修

熟議ファシリテーター養成研修　実施レポート

実施日：令和３年９月８日（水）１０時～１２時　会場：県生涯学習センター　参加者：５１名

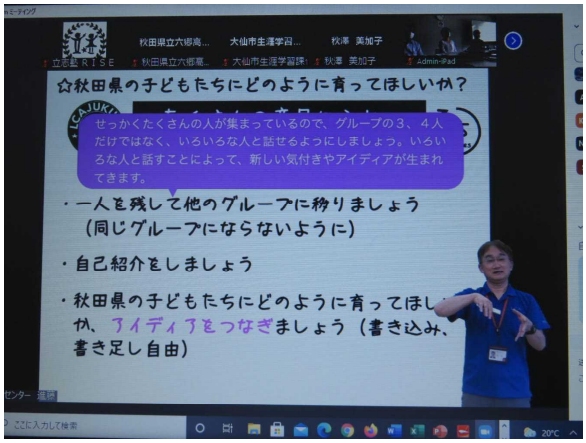
昨年度の「１回でわかるコミュニティ・スクール研修」を受け、今年度はコミュニティ・スクールを運営する上で必要な熟議と、その進行を担当するファシリテーターに求められる知識や技術を学ぶ研修を、オンライン形式で実施しました。

【講義】ファシリテーターに必要なスキルとは

当センターの**柏木　睦 副主幹（兼）学習事業班長**による講義が行われました。

熟議とは、『いろいろな立場の人が、テーマについて自分の思いを話し（＝「熟慮」と「議論」）、共通の目標に向かって自分に何ができるかを考えること』です。いろいろな立場の人の意見を聞き、共有できるため、コミュニティ・スクールを運営する際に有効な手法です。今回の研修では、「秋田県の子どもたちにどのように育ってほしいか？」というテーマで熟議を行うと想定し、ファシリテーションの心構えや技術を紹介しました。

講義ではまず最初に、ファシリテーターが担うべき５つの役割の説明がありました。

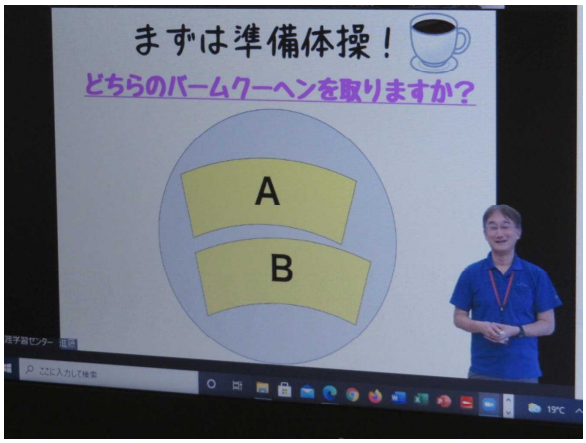


1　何のために話し合うのか明確にする
2　話しやすい雰囲気を作る
3　新しい気付きやアイディアを生み出す
4　目標を共有する
5　時間を適切に管理する

この役割を常に意識に置いた上で、レディネスを揃えることの重要性を説明しました。様々な立場の人が集まるからこそ、レディネス＝参加者が共通して持つ知識や理解を整えることが重要であると言えます。

そして話しやすい雰囲気を作るためのアイスブレイクの重要性や、広い視野を持って話し合いに臨んでもらうための情報提供の方法など、より多くの意見を出し合うために必要な「しかけ」について学びました。

その後は、実際の熟議で使用するスライドや、「最も心に残ったキーワード」を分類した実際の写真等を見ながら学びました。



最後に、熟議のポイントを５つ教わりました。

1　めざすものは「地図よりコンパス」
2　レディネスを揃えることが最重要
3　アイスブレイクは目的をもって
4　話合いの形式は何でもいい
5　いきなり否定しない、全員が話す場

【参加者の声】（抜粋）
・熟議の面白みや意義について学ぶことができました。今後、熟議を活用した取組が増えるとより良い町づくりができるなと感じました。
・まだまだ、「熟議」のコーディネートを私事として考えている教員や市町村教育委員会職員等は少ないと思うため、本研修の必要性を理解できている人も少ないように感じる。「熟議」の必要性について、機会を捉えて周知していきたい。

秋田県生涯学習センター　令和３年度　生涯学習・社会教育関係者研修

市町村職員専門研修②（兼）公民館等職員専門研修②　実施レポート

実施日：令和３年１０月６日（水）１０時～１５時　会場：県生涯学習センター　参加者：３８名

「障害者の生涯学習×公民館の防災」というテーマのもと、午前は市町村職員専門研修①と公民館等職員専門研修①の実施内容を振り返りました。そして午後は、「あなたならどうする？」と題して、避難所の質をめぐる問題について、議論を行いました。

【講義】災害時の食について

当センターの**柏木　睦 副主幹（兼）学習事業班長**と、**及川　真一 日本赤十字秋田短期大学講師**との対談形式で行われました。ここでは、当センターによる「障害者の生涯学習」への取組を過去に遡って説明した後、災害時の食について、及川先生の監修のもと作成し、公民館等職員専門研修①の際に紹介した動画から２本を視聴しました。

【発表】車中泊等体験実施報告

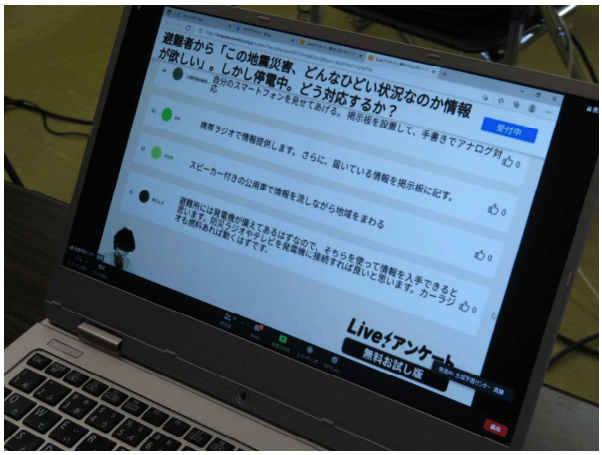
続いて、公民館等職員専門研修①の参加者から２名、当センター職員から１名の合わせて３名から、車中泊等体験実施報告が行われました。

キャンプ泊体験者からは、ポリ袋料理は袋に入れて煮るだけで完成するのでとても簡単であり、洗い物も少なく片付けも楽で水が節約可能であること、冷凍したままの食材を保冷剤代わりに利用できること、虫除けスプレーは必需品であることなどの報告がありました。また車中泊体験車からは、夏はとにかく車内の湿度・温度が高く苦しいこと、ポータブル電源や扇風機などで、居住環境は劇的に改善することなど、体験したからこそ分かる実感がこもった報告がありました。

【演習】あなたならどうする？

午後は、及川先生から、防災を非日常にしない「フェーズフリー」という新しい概念について説明がありました。「フェーズフリー」とは、日常と非日常（災害時）の垣根を取り払い、日常的に防災を意識する仕組みづくりに取り組むことです。そのようなものは実はたくさん存在しており、レジャーでも使えるアウトドア用品や、停電時に発電機や充電器として使用できるハイブリッド車などがあたります。

しかし、そのように準備をしていても、発災直後の初動期には避難者の健康に配慮した支援が行われるとは限りません。そのような場合に、避難所を運営する側としてどのようなことができるのかを、「あなたならどうする？」と題して議論を行いました。



【あなたならどうする？】

①避難者の中に、高齢で体力の弱りが目立つ人と、足腰が不自由で動きの取れない人が何人かいる。その人たちが、気分の悪さやトイレに行きにくいと訴え始めている。

②避難の場所は小学校の体育館。避難者は８００名。１２００枚の毛布がある。毛布は一人１枚と決めている。しかし、避難者から毛布が２枚欲しいと申し出があった。

③（右写真）

【参加者の声】（抜粋）

・研修をとおして防災教育に対する見方が変わりました。「自分の命は自分で守る」このために、いかに日常と切り離さず、無理せず、かつ効果的に訓練等を実施するのかを考えることができました。

・気楽に視聴できました。内容もキャンプに関する内容はとても興味深く、防災＋αの考えがあれば、いろいろな企画ができそうだなとワクワクしました。

秋田県生涯学習センター　令和3年度生涯学習・社会教育関係者研修

令和3年度　秋田県生涯学習・社会教育研究大会
日　　時：令和3年11月12日（金）　13時30分～16時 配信会場：秋田県生涯学習センター　4階　第1研修室　オンライン参加者：182名 参 加 者：行政職員、社会教育委員、生涯学習奨励員、学校関係者、生涯学習団体の方等

テーマ

持続可能な地域づくりに向けて　～共生社会の実現に向けて、私たちが生み出す「つながり」とは～

☑現代的課題への対応、関係者に求められる役割、資質
☑社会の変化に応じたネットワーク構築と「つながり」を担う人材の育成

【発　表1】「つながりを生み出す秋田県生涯学習センターの挑戦」
秋田県生涯学習センター　副主幹（兼）学習事業班長　柏木　睦

障害者の生涯学習のために何ができるのかを出発点として、健常者と障害者が共に学ぶスポーツ講座を実施しました。競技を一緒に行い、思いを伝え合う「ガヤガヤタイム」から、「こんな機会や場所があれば」という障害者の思いを知り、センター内に障害者スポーツコーナーを設けました。こうした取組が企業等から協力を得ることにつながり、令和2年度はボッチャ交流会を開催しました。

障害者、健常者どちらにも当てはまるテーマで防災講座、研修も行っています。今後も「地図よりコンパス」のマインドで挑戦を続けていきます。

＜障害のある方の防災講座＞

【発　表2】「つながりづくりの要として～社会教育主事のお仕事～」
岩手県教育委員会事務局中部教育事務所　主任社会教育主事　秋澤　美加子氏

「チーム社教推進事業」を通じて、4市町（花巻市、北上市、遠野市、西和賀町）の共通する課題解決に取り組みました。

遠野市では、秋田県生涯学習センターの研修で紹介されたファシリテートの手法を活用した熟議研修、当センター皆川雅仁社会教育主事による講演会を基にCS導入へのアプローチを支援しています。

思いを同じくする有志が企画し「読書ボランティア研修会」「学校へ行ってみよう会」も行いました。「楽しい」「相手の喜ぶ顔を想像しながら」などの思いが、ゆるやかなネットワークを生み出しています。

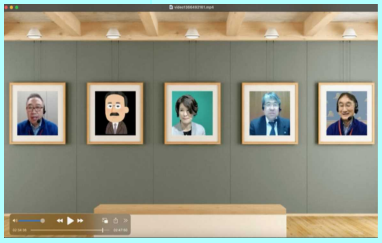
【パネルディスカッション】テーマ「持続可能な地域づくりに向けて」

パネラー	岩手県教育委員会事務局中部教育事務所 青森県総合社会教育センター育成研修課 秋田県生涯学習センター	主任社会教育主事 副課長・指導主事 副主幹（兼）学習事業班長	秋澤美加子氏 對馬　　明氏 柏木　　睦
ファシリテート	〃	主査（兼）社会教育主事	皆川　雅仁

主な話題

□担当者とのコミュニケーションが大切。相手の持続可能性も考え、時間をかけて本音で話せるように。地域を知っている人に、心は開かれていく。ニーズを先取りする視点をもち、先を見通しながらも今やれることに全力を尽くしていく。当事者の意識で事業を行う。

※青森県の取組紹介「大学生と語るキャリア教育形成サポート」
13ある大学が連携。大学生が高校生等に自分の体験等を話す機会等を構築する。


＜パネルディスカッションの様子＞

□大学生にとって：高校生への授業を体験し、社会で即戦力となるコミュニケーション、ファシリテーションの力を高める。単位の取得にもつながる。
□高校生にとって：自分の将来や地元のよさを再発見する。
□地元や企業にとって：地域活性化、若者の起業へのサポートにつながる。